東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

Thomas Hardy作品研究(I)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 1980-01-01
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/640

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

Thomas Hardy 作品研究（I）

内藤歓修

Th mas Hardy は生涯に，1871年に出版した *Desperate Remedies* から最後の小説 *The Well-Beloved* まで，十四の長編小説を発表した。その後は彼の生涯の課題であった詩作に専念したのであった。この論文の中では最初の小説から *The Trumpet-Major* までとそれ以降の作品とに分け，それら前半の小説群から，*Under the Greenwood Tree*, *Far from the Madding Crowd*, *The Return of the Native*, *The Trumpet-Major* の四作品作を選んで，Hardy の小説について論じてみたいと思う。勿論他の作品に長所や作者の秀れた才能の見られる個所が少ないという訳ではない。しかし，作品の一つ一つを全体として眺めた場合，Hardy の特質や本質を充分に表わしているようには思われない理由が簡単に理解出来るだろう。

さて，Hardy は当時の文壇の大御所 George Meredith (1828-1909) の「純粋に芸術的な意図」と「より複雑なプロット」の小説を書くようにという忠告を入れて *Desperate Remedies* を書いた。しかし，これには多くの煽情的な場面や意外な話が挿入されており，後に示されるような Hardy の優れた特質が見られない。その為か，何とかして文壇に出たいとあせっていた彼が期待した程にも，大して反響を呼ばなかった。

次に彼は大いなる野心は捨てて，自分が少年時代からよく知っている故郷の Dorset の田園生活を舞台にした牧歌的な小説を書いた。これが *Under the Greenwood Tree* であり，従来の小説の概念を抜け出した，彼独自の田園小説で，後になって表われる彼の苦汁に満ちた思索の陰，即ち圧倒的な宿命感，悲劇的雰囲気，もののあわれなどは見当らない。この作から Wessex が姿を表わす。Dorset の人々，風に鳴るもみの木や，とねりこの木，ぶなの木などの自然，昔からの聖歌隊や踊り。古きよき昔がここではまだかろうじて姿を残している。

この小説の題名は，当時流行していた方法—詩歌とか聖書とかから引用する—で付けられ，Shakespeare の *As you like it* の第二幕第五場の Amiens の次の歌からとられた。

Under the Greenwood Tree
Who loves to lie with me,
And turn his merry note
Unto the sweet bird's throat,
Come hither, come hither, come thither:

Here shall he see

No enemy

But winter and rough weather.(註1)

また副題があり，*A Rural Painting of the Dutch School* となっている。これが示すように縦糸に単純な恋愛物語—運送屋の息子 Dick と若く美しい教師 Fancy との恋愛—を配し横糸には郷里の下層民や職人達をリアルにユーモアをまじえて織込んだ。この人々は彼の作品に登場する Wessex の人々の原型であり，村の伝統的文化，風習などを伝え育てて来た人達である。こういった土着の人々は，この Wessex の田舎で昔ながらの相互扶助的な温い血の通った社会を作り，それぞれ個性を発揮しながら生きている。音楽が飯より好きで，上手な William じいさん，運送屋の Dick の父親，いつも気のきいた事を言う「学者」の Spinks,「まぬけ」で人々の嘲笑をかってはいるが，仲間はずれにされる事のない Leaf, Fancy の父で口数の少ない猟場番人 Geoffrey など，その地方の方言を自在に使いながら，活写している。

だがこういう古き良き時代も，すぐそこまで来ている新しい波に洗われる危機に瀕している。その象徴として，伝統的な村の聖歌隊がオルガンにとって代られるのである。昔から続いて来た聖歌隊は，村の人々の連帯の基であり，親密な人間関係を維持する手段でもあった。更に村人達と教会とを結ぶ強い絆でもあった。オルガンという新しい波により，「古さ」を代表する聖歌隊はひとたまりもなく流されてしまう。その結果人々はお互いの連体感が薄くなり，孤立してゆき，教会との結び付きは弱まってしまうのである。その聖歌隊が Fancy Day のオルガンに席を奪われ，初めて礼拝の進行とかかわり合いがなくなった時の姿を作者はこう書いている。

The old choir, with humbled hearts, no longer took their seats in the gallery as heretofore (which was now given up to the school-children who were not singers, and a pupil-teacher), but were scattered about with their wives in different parts of the church. Having nothing to do with conducting the service for almost the first time in their lives they all felt awkward, out of place, abashed, and inconvenienced by their hands. (第4部第5章)

最後の文からも分るように，作者は自然と強く結びついた生活共同体が近代化の波に洗い流されてゆくのに限りない哀惜の念を抱きこれから先の作品に古い伝統社会の崩解の過程を描写してゆくのである。

もう一つの筋も，「古さ」即ち「田園的心性」と「新しさ」即ち「都会的心性」との葛藤であり，せめぎ合いである。Dick Dewy と Fancy Day とは恋人同志である。しかし Fancy の父 Geoffrey は Fancy が生き甲斐で，娘を立派な男に嫁つがせたい一心で我慢してお金を貯めている。そこへ運送屋の息子 Dick が Fancy との結婚の許しを求めても，断わられるのは当然である。彼女の父親は地主 Shiner と結婚させたいのだ。そこで，恋人達は Elizabeth Endorfield に一計をさずかり，それを実行し Geoffrey の許しを得る。二人は思いがかないやっと婚

約する。暫くしてMichaelmasが巡って来る。Fancyが聖歌隊に代りオルガンを演奏する日である。その夕方，Maybold牧師が彼女を訪れ，求婚する。「都会的心性」を持つMaybold牧師が，これまた同じ心性を持つFancyに求婚するのだ。Fancyも教員養成学校を卒業して首席で免許状を取得し，オルガン演奏にも優れた才能を示す学校教師である。彼女は運送屋の息子で「田園的心性」を持つDickとMaybold牧師との選択に大いに迷う。牧師は懇願する。

'Don't refuse; don't,' 'he implored. It would be foolish of you - I mean cruel! Of course we would not live here, Fancy. I have had for a long time the offer of an exchange of livings with a friend in Yorkshire, but I have hitherto refused on account of my mother. There we would go. Your musical powers shall be still further developed; you shall have whatever pianoforte you like; you shall have anything, Fancy, anything to make you happy - pony-carriage, flowers, birds, pleasant society; yes, you have enough in you for any society, after a few months of travel with me! Will you Fancy, marry me? (第4部第6章)

二つの「心性」の間を心は揺れ，つい牧師の申し出を受けてしまう。翌日彼女は牧師に断りの手紙を書く。昨日の返事は女の浅はかな野心と虚栄心に一時的に屈してしまった為のものだからと取消した。彼女の「都会的心性」は彼女自らによって，その手紙の中に余す所なく述べられている。

It is my nature - perhaps all women's - to love refinement of mind and manners; but even more than this, to be ever fascinated with the idea of surroundings more elegant and pleasing than those which have been customary. And you praised me, and praise is life to me. It was alone my sensations at these things which prompted my reply. Ambition and vanity they would be called; perhaps they are so.

After this explanation I hope you will generously allow me to withdraw the answer I too hastily gave. (第4部第7章)

これ程よく自分の性格を分析出来，認識しているFancyではあるが，その「都会的心性」は相変らず顕著である。結婚式の日にも，運送屋Reuben Dewyに真白な手袋をさせてみたり，父やReubenに「きさま」と呼ぶ事や酒を飲んだ後，口を手の甲でふく事を禁じたりした。これはイギリスの田舎では大昔からの習慣だが，上流階級では，すたれているものだという，Fancyの意見による為である。昔からの身振りや言葉が，彼らの生活に豊かさを与えていたのに，Fancyの「都会的心性」はそれらを否定する。一旦は「都会的心性」の具現者であるMaybold牧師を捨て，「田園的心性」を持つDickを選んで，自らも「田園的心性」の持ち主になるかのように見えたFancyは，本質的には「都会的心性」を捨て切れない。また彼女は，オルガン奏者としても，自分の意志とは別に，地主ShinerやMaybold牧師に手を貸して，昔からの聖歌隊の消滅に一彼買っているのである。このように「都会的心性」の殻から抜け切れないFancyが，聖歌隊の一員であり，「田園的心性」の持ち主であるDickと結婚しても，

果してうまくゆくであろうか。「田園的心性」の持ち主のみが，真の温かい人間的結びつきをする事が出来ると信じているような Hardy は，Maybold 牧師との秘密も隠したままで，結婚する Fancy には，全面的信頼を与えていない。愚直とも言える善良な Dick が，今迄親切であった牧師が，急によそよそしくなって結婚式もしてくれなそうだと，牧師の態度変りを不思議がると，Fancy は，

'I wonder!' said Fancy, looking into vacancy with those beautiful eyes of hers - too refined and beautiful for a tranter's wife; but, perhaps, not too good. (第5部第1章)

全編ユーモアに包まれて，喜劇的性格を持った作品ではあるが，最後迄，都会対田園の対立は解消されてはいない。愚直な男 Dick と華美な装飾を好む Fancy の系譜は，後の小説 *Far from the Madding Crowd, The Return of the Native* 等に於ける，平凡だが生真面目な男と，派手で享楽主義的な浮気女という図式として表われる。

この作品は発表当時から好評を博したと言われる。その原因は恐らく，作者 Hardy の内在的な諸問題が未だ混沌としていて，しっかりとした姿を取り得なかったが故に，それらを脇に置き，故郷の自然と幼年時代からの記憶と経験をふまえて，更に客観的に観察をしながら，今は消えつつある懐しい古き良き時代，農民の生活，習慣などを哀惜の念をもって，謡い上たげ所にあろう。

次に取り上げる *Far the from Madding Crowd* は *Under the Greenwood Tree* といくつかの類似点があり，その延長線上にある事が分る。舞台は木々の緑に覆われた田園の世界から豊かな牧草地に変り，登場人物も Dick Dewy が Gabriel Oak となっているが，二人共農村生活の真髄の具現者としての性格を持っている。更にその農村生活の平和を乱す都会からの闖入者，アウトサイダーは Maybold 牧師であり Sergeant Troy なのである。その両者の間で心を乱され懊悩する女は，Fancy Day と Bathsheba Everdene で共に可成りの教育を受けたインテリである。そして *Under the Greenwood Tree* で試みた Hardy のテーマが，一つの明確な姿をとって来て，これ以降の作品の基調をなすようになった。彼はその作品の中で，農民達の昔からの内面の秩序と安定が，「都会」の影響で揺らいでゆく過程を描き，田園生活が崩解してゆくのを無念の気持で見守っているのである。そして Wessex の平和な農民社会が外部からの侵入者を迎えた時，そこに生じる「農村」と「都会」の相剋を捉える事を中心主題とするのである。

この作品の題名 *Far from the Madding Crowd* も前作と同様詩歌の一節から取り，今回は Thomas Gray の *Elegy Written in a Country Churchyard* からとられた。

Far from the Madding Crowd's ignoble strife
Their sober wishes never learn'd to stray;
Along the cool sequester'd value of life
They kept the noiseless tenour of their way.

Hardy は伝統的牧歌文学といったものを，書こうと意図してこのような題を選んだ節が見ら

れる。彼はGrayの*Elegy*のイメージから来る場面を幾つか描いている。老犬Georgeが深追いをしている羊の鈴の音とか夕闇に見えるWeatherbury教会の塔，そして“beetle”の音(*Elegy*ではかぶと虫のぶうんという音であり，この作品ではOakが嵐襲来の前に一人暗闇の中で，大麦の山を大雨から助ける為かけ矢を振るう音）などが*Elegy*のイメージと重なり合う。

全編の構成は，*Under the Greenwood Tree*のように織り合わされた二本の糸から成っている。その糸の一本は，Bathsheba Everdeneを中心とした三人の男Gabriel Oak, William Boldwood, Sergeant Troyの対立関係であり，他の一本はJan CogganやJoseph Poorgrass, William Smallburyなどの脇役達の関係である。*Under the Greenwood Tree*ではMellstock Quireの教会での席がFancyのオルガンに取って代られ，時代の波に流されてゆく過程が主筋となり，FancyとDickとの単純な恋物語が脇筋であったのが，この作品では主筋と脇筋が逆になり，主筋が更に複雑となり関係する人の数も多くなる。

独身の二十八才の牧場主Gabriel Oakは，叔母の家に搾乳婦として手伝いに来ているBathsheba Everdeneを見染め求婚するが，根っから正直でお世辞も言えない性格で失敗してしまう。その後彼は破産して，彼女に雇われる。Gabriel＝Bathshebaの関係が出来る。Bathshebaはいたずら心で，近くに住む三十八才の謹厳実直な地主William Boldwoodにヴァレンタインの日に「私と結婚して」と封蠟印のあるカードを送り，彼を夢中にさせてしまう。Boldwood＝Bathshebaの関係が出来る。この主流に対してFanny＝Troyの関係があり支流をなす。TroyとBathshebaの偶然の出会いで，Troy＝Bathshebaの関係が出来，Boldwood＝Bathshebaの関係を脅かし，Troy＝Fannyの関係が消滅し，TroyがBathshebaと結婚する事によりTroy＝Bathshebaの関係が確定し主流となる。ところがFannyが赤貧身を洗うような姿で現われ，この関係にくさびを打ち込み，Troyの出奔を促す事になる。彼の家出により，Troy＝Bathshebaの関係は表面上崩解したかに見え，Boldwood＝Bathshebaの関係が復活しそうになる。そしてクリスマス・パーティーの晩の惨劇が引き起される事となる。Troyが長い間の失跡後，Bathshebaを奪い返す為に姿を表わす。一度ならず二度迄も結婚の望みをTroyにより断たれて逆上してしまい，Troyを射殺しそのまま自首して禁固刑に服する。ここで一挙にTroy＝Bathsheba, Boldwood＝Bathshebaの二つの関係は消滅してしまう。残ったのは最初のGabriel＝Bathshebaの関係で，これが復活し結婚に至り，ハッピー・エンドとなる。このように筋は*Under the Greenwood Tree*に似てはいるが，この作品では更に複雑となり，後の「Wessex小説」群に受けつがれてゆくのである。この点で，*Far from the Madding Crowd*でHardy小説の筋の運び具合，構成の原型は確立したと言えるであろう。

このような変化に富んだ，波乱に満ちた筋の面白さに加えて，この作品の魅力は登場人物の個性，生き方，また舞台になる自然の描写方法にもある。Hardyは事物や人物を多方面から，単に羅列的に詳しく描写するのではなく，その本質を把握した後，自分で決めた角度から取捨

選択した写実的メイージを使って，外面から表現し，その表現によって全貌を象徴的に暗示しようとする象徴的写実主義の方法をとっている。この手法が読者に深い感銘を与えたのであった。

Hardy はこの手法を使って，登場人物を魅力ある者として描いていった。女主人公の Bathsheba は美しく，魅力のある女性である。

The handsome girl waited for some time idly in her place, and the only sound heard in the stillness was the hopping of the canary up and down the perches of its prison. Then she looked attentively downwards. It was not at the bird, nor at cat; it was at an oblong packge tied in paper, and lying between them. She turned her head to learn if the waggoner were coming. He was not yet insight; and her eyes crept back to the package, her thoughts seeming to run upon what was inside it. At length she drew the article into her lap, and untied the paper covering; a small swing looking-glass was disclosed, in which she proceeded to survey herself attentively. She parted her lips and smiled.

It was a fine morning, and the sun lighted up to a scarlet glow the crimson jacket she wore, and painted a soft lustre upon her bright face and dark hair. The myrtles, geraniums, and cactuses packed around her were fresh and green, and at such a leafless season they invested the whole concern of horses, waggon, furniture, and girl with a peculiar vernal charm. What possessed her to indulge in such a performance in the sight of the sparrows, blackbirds, and unperceived farmer who were alone its spectators, - whether the smile began as a factitious one, to test her capacity in that art, - nobody knows; it ended certainly in a real smile. She blushed at herself, and seeing her reflection blush,blushed the more.（第１章）

彼女は自分の魅力に自信のある，ナルシス的な気どりのある女である。この自信が三人の男を引きつけ，じらし，拒ばみ，最後にはそのうち二人迄破滅させてしまうのである。だがただ美しいだけでなく，頭もよくしっかりしている。 'one who finished a thought before beginning the sentence which was to convey it' である。そして，Gabriel の求婚に対しても，

It wouldn't do Mr Oak. I want somebody to tame me; I am too independent; and you would never be able to, I know.

Oak cast his eyes down the field in a way implying that it was useless to attempt argument.

'Mr Oak,' she said, with luminous distinctness and common sense, 'you are better off than I. I have hardly a penny in the world - I am staying with my aunt for my bare sustenance. I am better educated than you - and I don't love you a bit: that's my side of the case.（第４章）

と歯に衣を着せず割切って物を言う，はっきりとした性格の持主であるように見える。しか

し，ヴァレンタインの日に Boldwood にいたずらで出した恋文の為，彼にしつっこくつきまとわれるのに悩んでいる時，作者は彼女についてこう言う。

With Bathsheba hastened act was a rash act; but as does not always happen, time gained was prudence ensured. It must be added, however, that time was very seldom gained (第20章)

Bathsheba は頭も良く，仕事の才能もあり，農業労働者の上に立って能力を発揮するのであるが，彼女の 'an impulsive nature' は運命が様々な姿で現れて来ると，易々と誤りを犯してしまうのである。これは彼女の女性らしさ (womanliness) に起因するのである。Gabriel の求婚に対して 'I don't love you a bit' と言い切り，Boldwood に対しても「尊敬」はしているが「愛していない」と言う，理性の勝った冷静な Bathsheba だが，Troy の都会的魅力には抗しえない。

Bathsheba loved Troy in the way that only self-reliant women love when they abandon their self-reliance. When a strong woman recklessly throws away her strength she is worse than a weak woman who has never had any strength to throw away. One source of her inadequacy is the novelty of the occasion. She has never had practice in making the best of such a condition. Weakness is doubly weak by being new. (第29章)

自分と Troy との事が，召使い達の噂のたねとなり，Bathsheba は召使い達には自分の気持を押えて，その場をごまかす。そしてお気に入りの女中 Liddy と二人だけになった時，Liddy が自分達が間違っていた，世間の者達にはよく訂正しておくと言うと，

Bathsheba burst out: 'O Liddy, are you such a simpleton? Can't you read riddles? Can't you see? Are you a woman yourself?'

Liddy's clear eyes rounded with wonderment.

Yes; you must be a blind thing, Liddy!' she said in reckless abandonment and grief. O, I love him to very distraction and misery and agony! Don't be frightened at me, though perhaps I am enough to frighten any innocent woman. Come closer - closer.' She put her arms round Liddy's neck. 'I must let it out to somebody; it is wearing me away! Don't you yet know enough of me to see through that miserable denial of mine? O God, what a lie it was! Heaven and my Love forgive me. And don't you know that a woman who loves at all thinks nothing of perjury when it is balanced against her love? There, go out of the room; I want to be quite alone.' (第30章)

自尊心が強くあまのじゃく的な所がある Bathsheba の心の動きがよく出ている。こんな彼女が Troy に魅惑されて結婚すると，軽薄で薄情な Troy に不信感を募らせ，衝動的に結婚してしまった自分の愚かさを幾度も後悔して「自分自身を憎む」ようになる。Bathsheba は理性と感情，精神と肉体の相剋に苦悩する女性である。Fanny が Troy の私生児を生み落し，死んで Bathsheba の家に一晩一時的に安置される。その Fanny の遺骸に Troy がキスする。

Bathsheba はそれを見ると，突如として彼に飛びつく。

At the sight and sound of that, to her, unendurable act, Bathsheba sprang towards him. All the strong feelings which had been scattered over her existence since she knew what feeling was, seemed gathered together into one pulsation now. The revulsion from her indignant mood a little earlier when she had meditated upon compromised honour forestalment, eclipse in maternity by another, was violent and entire. All that was forgotten in the simple and still strong attachment of wife to husband. She had sighed for her self-completeness then, and now she cried aloud against the severance of the union she had deplored. She flung her arms round Troy's neck, exclaiming wildly from the deepest deep of her heart -

'Don't - don't kiss them! O, Frank, I can't bear it - I can't! I love you better than she did: kiss me too, Frank - kiss me! *You will, Frank, kiss me too*!' (第43章)

この激情のほとばしりは，理性を吹き飛ばし，女らしい弱さを見せる。Bathsheba は強情っぱりで気むらな一面も弱い女らしさを持つ一面もある。Hardy の描き方は真に，彼女を生々と魅力ある女性にしている。

主人公 Gabriel Oak は地味で目立たない男であり，風采もさしてよくない。作者 Hardy は一見皮肉にからかっているような調子で，その実温い思いやりに富む言葉で Gabriel の風采を描いている。その顔はこんな風だ。

When Farmer Oak smiled, the corners of his mouth spread till they were within an unimportant distance of his ears, his eyes were reduced to chinks, and diverging wrinkles appeared round them, extending upon his countenance like the rays in a rudimentary sketch of the rising sun. (第 1 章)

また彼の姿は——

He wore a low-crowned felt hat, spread out at the base by tight jamming upon the head for security in high winds, and a coat like Dr Johnson's; his lower extremities being encased in ordinary leather leggings and boots emphatically large, affording to each foot a roomy apartment so constructed that any wearer might stand in a river all day long and know nothing of damp - their maker being a conscientious man who endeavoured to compensate for any weakness in his cut by unstinted dimension and solidity. (第 1 章)

ユーモアに富んだ表現の裏には，Hardy の温い愛情がうかがえる。彼は少々猫背ではあるが，注意深く着付けをすれば，堂々とした風采となるだけの背丈も肩幅も持っていたし，青春時代の名残りも未だ感じられる程の若さは残していた。不運の為無一文になってしまって，普通の人ならば無頼の男になり果ててしまうような奈落の底に落ちて，彼は以前にはなかった崇高さを身につけた。徳性の高い保守的な，誠実な羊飼いである。この誠実さが終始 Bathsheba を陰に陽に助け，最後には彼女をして，Gabriel なしの生活は不可能であると思わせる。そし

て伝統的な結婚という目的地に着くのである。そこに着く時の Bathsheba の心は，随分素直になっている。Gabriel が彼女と結婚する為に，何時迄も彼女の農場にいるのだと噂されるのがいやだから，農場から手を引くのだと言うと——

'Marrying me! I didn't know it was that you meant,' she said, quietly. 'Such a thing as that is too absurd - too soon - to think of, by far!'

'Yes of course, it is too absurd. I don't desire any such thing; I should think that was plain enough by this time. Surely, surely you be the last person in the world I think of marrying. It is too absurd, as you say'

'"Too - s-s-son" were the words I used.'

'I must beg your pardon for correcting you, but you said, "too absurd", and so do I.'

'I beg your pardon too!' she returned, with tears in her eyes. '"Too soon" was what I said. But it doesn't matter a bit - not at all - but I only meant, "too soon". Indeed, didn't, Mr Oak, and you must believe me!'

Gabriel looked her long in the face, but the firelight being faint there was not much to be seen. 'Bathsheba,' he said, tenderly and in surprise, and coming closer: 'If I only knew one thing - whether you would allow me to love you and win you, and marry you after all - If I only knew that!'

'But you never will know,' she murmured.

'Why?'

'Because you never ask.'

'Oh - Oh!' said Gabriel, with a low laugh of joyousness. 'My own dear——'

You ought not to have sent me that harsh letter this morning,' she interrupted. 'It shows you didn't care a bit about me, and were ready to desert me like all the rest of them! It was very cruel of you, considering I was the first sweetheart that you ever had, and you were the first I ever had; and I shall not forget it!'

'Now, Bathsheba, was ever anybody so provoking?' he said, laughing. You know it was purely that I, as an unmarried man, carrying on a business for you as a very taking young woman, had a proper hard part to play - more particular that people knew I had a sort of feeling for 'ee; and I fancied, from the way we were mentioned together, that it might injure your good name. Nobody knows the heat and fret I have been caused by it.'

'And was that all?'

'All.'

'O, how glad I am I came!, she exclaimed, thankfully, as she rose from her seat. 'I have thought so much more of you since I fancied you did not want even to see me again. But I must be going now, or I shall be missed. Why, Gabriel,' she said, with a slight laugh, as

they went to the door, it seems exactly as if I had come courting you - how dreadful!'
(第56章)

Bathsheba の最初の夫となる Sergeant Troy は，軽薄才子の見本のような男である。彼は都会的魅力ある男だが，打算的で利己的である。随分世慣れていて，損する事は絶対にしない。失敗する事がないのだ。Fanny の誘惑，Banhsheba との結婚などに成功し，出奔後加わった国内巡業団の旅役者の一座に加わっても，上手に振舞う。殆んどの事に一応は成功するが，それから先の考えがない。皆中途半端で最後迄全うする事がないのである。それが故に一見成功したかのように見えたものが失敗となり，自分の命すら無駄に落してしまう。能力はあるが信念がない。彼は一見不誠実であるが，Fanny にはいくつか誠意を見せている。兵営迄彼に結婚してくれと頼みに来た Fanny の為に，約束の日には一応言われた教会で衆人環視のなかで待ったり，Bathsheba と結婚後，すっかり零落してやつれてしまった Fanny に再会した時も Bathsheba をあざむいて迄世話をしてやろうとする。そして彼女が死んでしまった後，妻からせしめた持ち金全部を使って立派な墓を建ててやる。その上，墓のまわりには花を植えて飾ってやる。例えそれが，自分の精神的苦痛をまぎらわす手段であったとしても，彼なりの人間らしさをこの行為は示している。しかし，天は無情である。墓碑のすぐ上に，張り出している桶の水落しがあるのを知らなかった Troy が，次の朝墓の所迄来てみると，花は根こそぎ流され，無残な姿となっている。彼は生れて初めて自己反省する情況に追いたてられる。

To curse his miserable lot was at first his impulse, but even that lowest stage of rebellion needed an activity whose absence was necessarily antecedent to the existence of the morbid misery which wrung him. The sight, coming as it did, superimposed upon the other dark scenery of the previous days, formed a sort of climax to the whole panorama, and it was more than he could endure. Sanguine by nature, Troy had a power of eluding grief by simply adjourning it. He could put off the consideration of any particular spectre till the matter had become old and softened by time. The planting of flowers on Fanny's grave had been perhaps but a species of elusion of the primary grief, and now it was as if his intention had been known and circumvented.

Almost for the first time in his life Troy, as he stood by this dismantled grave, wished himself another man. It is seldom that a person with much animal spirit does not feel that the fact of his life being his own is the one qualification which singles it out as a more hopeful life than that of others who may actually resemble him in every particular. Troy had felt, in his transient way, hundreds of times, that he could not envy other people their condition, because the possession of that condition would have necessitated a different personality, when he desired no other than his own. He had not minded the peculiarities of his birth, the vicissitudes of his life, the meteor-like uncertainty of all that related to him, because these appertained to the hero of his story, without whom there would have

been no story at all for him; and it seemed to be only in the nature of things that matters would right themselves at some proper date and wind up well. This very morning the illuson completed its disappearance, and, as it were, all of sudden, Troy hated himself.
(第46章)

彼はこれを最後に本舞台からしりぞき，戻って来るとすぐに悲惨な最後に終るのである。

善良で誠実，謹厳な男の典型である Boldwood は，哀れな末路をたどる。Bathsheba のいたずらのヴァレンタインのカードを受け取らなければ，彼は静かな人生を送っていたろう。様々な点で Sergeant Troy と好対照をなすこの男は，落着いた謹厳な態度のかげに，破滅型のいたましい情熱をかくしていた。最初は——

To Boldwood women had been remote phenomena rather than necessary complements - comets of such uncertain aspect, movement, and permanence, that whether their orbits were as geometrical, unchangeable, and as subject to laws as his own, or as absolutely erratic as they superficially appeared, he had not deemed it his duty to consider.
(第17章)

しかし Bathsheba のいたずらにうまうまと乗ってしまい，彼女に執拗に迫り求婚する。うまくゆきそうだと思った時には，トンビに油げで Troy に先を越され奪われてしまう。更に不運な事には，果されぬ恋に悶々としている間，暴風雨に麦をやられて一年間の全収入を失ってしまう。Troy の出奔後再度結婚のチャンスが巡って来たと喜んだのも束の間，Troy の出現で絶望のふちに沈む。そして思い余って Troy を射殺，牢獄につながれてしまう。彼は真面目で，心根もやさしい。恋仇の Troy が Fanny と結婚の約束をしていながら Bathsheba を誘惑するが，その秘密を暴こうとしない。これ程迄に人の善い Boldwood は最後迄幸福になれずに，自ら破滅の道をたどるのは何故か。作者 Hardy が農村生活に同情をもって描いたのは，大自然に溶け込んだ生活が上辺だけの中味のない頽廃し切った都会生活を救い，活力を与える事が出来ると考えたからに外ならない。Boldwood は彼の考えと相容れない所がある。即ち彼は田舎に住んで農業を営んではいるが，生活も心情も都会的なものを指向している。そんな彼が「都会的心性」の持主 Troy に破れるのである。Hardy の計算された筋であろう。田園に住んで田園から抜け出そうという心情の持ち主を Hardy は許さないように思われる。こういう傾向は *The Return of Native* の Eustacia にも見られる。

以上述べたように，Bathsheba を中心としてある者は成功し，ある者は失敗し又破滅する。そしてここに表われるのは「田園的心性」対「都会的心性」の対立，「野卑」と「洗練」，「無知」と「教育」，「自然」と「文明」の相対する価値感の対立である。だが，一方が一方を制するという単純な解決は与えられない。例えば「田園的心性」を代表する Gabriel と「都会的心性」を持つ Bathsheba がめでたく結婚するが，二人が必ずしもうまくゆくものではないという一抹の不安を残して，この物語は終る。

'Faith,' said Coggan, in a critical tone, turning to his companions, the man hev learnt

to say "my wife" in a wonderful naterel way, considering how very youthful he is in wedlock as yet - hey, neighbours all?'

I never heerd a skilful old married feller of twenty years' standing pipe "my wife" in a more used note than 'a did,' said Jacob Smallbury. It might have been a little more true to nater if't had been spoke a litlle chiller, but that wasn't to be expected just now.'(第57章)

次の作品 *The Return of the Native* は，後に大作と言われる幾つかに数えられるうちの最後に書かれたものであるが，その完成度は今一つという所である。心理描写はリアリズムの手法を用いているが，構成や性格づけはロマンチックな要素を持つ。それ故後の作品 *The Mayor of Casterbridge, Tess of the D'Urvervilles, Jude the Obscure* などの悲劇とは，性格を異にし，その作品の位置づけは難しくなっている。

The Return of the Native を一読した者であれば誰でも，この小説に於ける大きな存在として Egdon Heath を感じるであろう。物語の舞台となった Egdon Heath は，ここで主役を演じている。いや，この作品自体 Egdon Heath という荒地を説明したものと言ってもよかろう。その冒頭の文章は次のように始まる——

A Saturdy afternoon in November was approaching the time of twilight, and the vast tract of unenclosed wild known as Egdon Heath embrowned itself moment by moment. Overhead the hollow stretch of whitish cloud shutting out the sky was as a tent which had the whole heath for its floor.

The heaven being spread with this pallid screen and the earth with the darkest vegetation, their meeting-line at the horizon was clearly marked. (第1篇第1章)

広大な Egdon Heath も，一度 Hardy の筆にかかると，外界から遮断され，閉された世界となる。「虚ろな白け雲」を「天幕」の底辺とする荒野は，心理的には雲で天をおおわれ，くっきりとした地平線に区切られている。しかし，実はその地平線の向うには世界は続いているのではあるが。

そして Egdon Heath は自らの中で十年一日の如く，単調な持続性を以て，自然の営みを操り返し，自足している。夕暮を迎えれば——

The sombre stretch of rounds and hollows seemed to rise and meet the evening gloom in pure sympathy, the heath exhaling darkness as rapidly as the heavens precipitated it. And so the obscurity in the air and the obscurity in the land closed together in a black fraternization towards which each advanced half-way. (第1篇第1章)

自然の与える情況に従順に従うというよりは，その現象を助長してゆくようである。また四季の移り変りに於ける姿も，自然の与える環境を如実に反映してゆく。春も過ぎて初夏になると，荒野はやっと緑色に変化する。それでも，まわりは羊歯しかなく，蕾も花もなく，鳥の声も聞えない世界，あたかも「石炭期の古代世界」のようだ。Clym Yeobright は横になってあたりを眺める。

He was in a nest of vivid green. The ferny vegetation round him, though so abundant, was quite uniform: it was a groove of machine-made foliage, a world of green triangles with saw-edges, and not a single flower. The air was warm with a vaporous warmth, and the stillness was unbroken. Lizards, grasshoppers, and ants were the only living things to be beheld. The scene seemed to belong to the ancient world of the carboniferous period, when the forms of plants were few, and of the fern kind; when there was neither bud nor blossom, nothing but a monotonous extent of leafage, amid which no bird sang. (第3篇第5章)

それが夏の炎天下になると灼熱の太陽に照らされ死の世界のようになる——

The sun had branded the whole heath with his mark, even the purple heath-flowers having put on a brownness under the dry blazes of the few preceding days. Every valley was filled with air like that of a kiln, and the clean quartz sand of the winter water-courses, which formed summer paths, had undergone a species of incineration since the drought had set in. (第4篇第5章)

こういう土地にヒースは繁茂しているのである。例え生物が生育するのに適した環境でなくとも，自らの生命を絶やす事なく一面に群生する。そして咲かせた花を，炎暑の下で立ち枯れにさせ，その無念さを訴えるように，枯れた壺花が風に吹かれて音を立てる。それはこゆ EgPon の荒地に，夏の炎暑にも冬の木枯しにも負けず，生命を維持してゆくヒースの自然に対するささやかな抵抗の声でもあろう。そしてこの閉された世界にしがみついているか弱いヒースを，Egdon Heath は不条理に押えつけもてあそぶ。無力なヒースは，それのなすままになるしか他に術がない。そこに住む人間を象徴しているかのようである。彼らも他に逃げ場所がなく閉込められ，Egdon Heath に翻弄され抑圧され，或る者はその戦いに敗れ去り，或る者は妥協しそこにしばりつけられてしまう。

Egpon Heath はこの作品で大きな特徴を持っているが，他にも大きな特徴がある。それは「三一致の法則」である。Hardy は Harold Child に宛てた手紙の中で，*The Return of the Native* に於いて「三一致の法則」を厳守したと述べている(註3)。尤も小説形式に於いて「三一致の法則」を厳守するのは，仲々むずかしいので，多少は修正がされているのは仕方がない。この作品は十一月五日に始まり，翌年の十一月六日に話が終る。一年と一日で終るのである。これが「時の一致」である。次は「場の一致」。これは Egdon Heath を一つの舞台と見れば，完全な形で実践されている。物語はすべて Egdon Heath で進行している。「筋の一致」は Eustacia の Egdon Heath 脱出の虚しい努力が主筋となって，それに他の登場人物を有形無形に巻き込み，悲劇的結末に収束してゆく。この法則の中で最も重要なのは，「場の一致」に於ける Egdon Heath である。そして Egdon Heath の設定をする為に「三一致の法則」が必要である。言い変えるなら，Egdon の荒野を舞台にする為に，「三一致の法則」を使ったと言えよう。これ程迄に重要な位置を占める Egdon Heath は，あらゆる物に影響を与えるのは当然

であろう。Eustacia や Clym をはじめ，他の登場人物すべてに影響を及ぼしている。姿や性格，行動は言うに及ばず，その運命すら左右されているのである。

この物語の主人公は Eustacia Vye である。彼女は本来 Egdon Heath のような地所に相応しい女性ではない。

Eustacia Vye was the raw material of a divinity. On Olympus she would have done well with a little preparation. She had the passions and instincts which make a model goddess, that is, those which make not quite a model woman. (第1篇第7章)

身体つきは「肉づきのいい四肢を持つずっしりとした女」で，「色は青ざめても赤らんでもいない」。眼つきには，異教徒的な所があって，並のイギリス女ではないように見える。

She had Pagan eyes, full of nocturnal mysteries, and their light, as it came and went, and came again, was partially hampered by their oppressive lids and lashes; and of these the under lid was much fuller than it usually is with English women. This enabled her to indulge in reverie without seeming to do so: she might have been believed capable of sleeping without closing them up. Assuming that the souls of men and women were visible essences, you could fancy the colour of Eustacia's soul to be flame-like. The sparks from it that rose into her dark pupils gave the same impression. (第1篇第7章)

彼女の「魂の紅蓮の炎」は自分のまわりの者を焼き尽し，また自らの身体も焼いてしまう程激しいものであった。その唇は「建築上有名なあのサイマクレタ又はオージーの曲線を殆んど幾何学的精密さで表して」おり，それ故「彼女はあのマッフィン・パンを二つに割って重ねたような唇の所有者であるサクソン族の海賊と共にシュレスウィッヒ地方から渡来したものではない事がすぐ分った」。南欧の土中深く埋れた大理石像にしか見い出せない唇をしているのである。その風貌はギリシャ女神の誰かに似ており，古代世界に密接な親近性を持つ程であった。だが——

But celestial imperiousness, love, wrath, and fervour had proved to be somewhat thrown away on netherward Egdon. Her power was limited, and the consciousness of this limitation had biassed her development. Egdon was her Hades, and since coming there she had imbibed much of what was dark in its tone, though inwardly and eternally unreconciled thereto. Her appearance accorded well with this smouldering rebelliousness, and the shady splendour of her beauty was the real surface of the sad stifled warmth within her. (第1篇第7章)

Egdon の暗い色調を Eustacia が如何に吸収し，自分のものにしたかは，十一月五日の篝火の祭に村人達の仲間に入る事もせず，ただ一人 Rain barrow にたたずんで動かないでいる姿は，まわりの矢張り動かない全体の一部となってしまい，「もし動き出したら奇妙な現象だという感じを与えた」程 Egdon Heath の背景に融和しているのを暗示している。半面，彼女の心の奥底には Egdon Heath という大古の闇に閉じ込められて，光を求める Prometheus 的な

反逆精神がくすぶっていた。冬至にあたって村人達は篝火をたく祭りを行う。これは，次のように説明されている。

Moreover to light a fire is the instinctive and resistant act of man when, at the winter ingress, the curfew is sounded throughout Nature. It indicates a spontaneous, Promethean rebelliousness against the fiat that this recurrent season shall bring foul times cold darkness, misery and death. Black chaos comes and the fettered gods of the earth say, Let there be light. (第1篇第3章)

他の篝火にもまして明ると輝くのは，Eustacia の焚かせる火であり「星くず全体の中のまさに月ともいうべきもの」程際立っていた。これは村人が共同で焚く篝火と違って彼女一人孤高を守って，反抗の火を焚いているうを表わし，後にロマン主義的反抗者の悲劇的最後に至る事を暗示している。

この篝火は Damon Wildeve を呼び出すものであった。Eustacia は Wildeve との逢瀬を楽しんでいるが，彼をどうしても欲しい訳ではない。「都会的心性」を持つ彼女は，軽薄ではあるが「都会的心性」の持ち主である Wildeve を心の慰みとして逢っているのである。この Egdon Heath には彼の他にこのような人物はいない。しかし彼に満足していた訳では決してなく，他に情熱の吐け口がなかったからである。Wildeve が現れた時篝火は赤々と燃えていたのではなく，「昼の屍の中で生きている目のようで」あっただけで，Eustacia の心を暗示している。結局，彼は彼女にとって「夢が結晶する事もあり得る対象」でしかなかった。そして Thomasin Yeobright にも見限られそうだという事が分ると，彼に対する彼女の心も急速に冷えてゆくのである。そんな時 Clym Yeobright の帰郷の話が祖父の Vye 大佐によって彼女に伝えられる。

Clym Yeobright についての話は Eustacia の心の空白を一挙に埋めてしまった。そして彼に会う前から，自分の恋人と決めてしまった。彼女はその「情熱の幻想的性質」の為，Clym に初めて声をかけられた晩，「白銀の鎧に身を固め兜の面頬を深くおろした男」と踊る夢を見る。彼女を否応なしに閉込めている Egdon Heath から，またその「宿命的圧迫から，彼女の魂を救い出してくれる力を持った」男性として，彼女は Clym を考えたのであった。このように，ロマンチックな夢を託して Clym に近づき，彼もこれに応じて結婚する。

しかし，Eustacia は Egdon を嫌う者として描かれ，Clym は都会のはなやかな，虚飾に満ちた生活を厭い故郷であり，心の寄り所である Egdon に戻って来たものとして描かれている。作者は彼女の性格をこう書いている——

Take all the varying hates felt by Eustacia Vye towards the heath, and translate them into loves, and you have the heart of Clym. (第3篇第2章)

すぐその前の文章で Clym の性格について述べている——

He walked along towards home without attending to paths. If any one knew the heath well it was Clym. He was permeated with its scenes, with its substance, and with its

odours. He might be said to be its product. His eyes had first opened thereon; with its appearance all the first images of his memory were mingled; his estimate of life had been coloured by it; his toys had been the flint knives and arrow-heads which he found there, wondering why stones should 'grow' to such odd shapes; his flowers, the purple bells and yellow furze; his animal kingdom, the snakes and croppers his society, its human haunters. (第3篇第2章)

二人の生き方に対する姿勢は根本的に正反対である。彼の情熱は観念的，精神的なものに向い，彼女はといえば燃えさかる官能的情熱の化身である。この二人が結ばれるのは，作者のロマンティシズムに対するアイロニーであろう。破綻は用意されているのである。そして筋を追うにつけてそれは明確になってゆき，破滅への道を進んでゆく。

Clym Yeobrigh の顔には彼の人生観，即ち「人生は耐え忍ぶべきものだと諦めてかかるあの人生観」が窺われた。そして——

The face was well shaped, even excellently. But the mind within was beginning to use it as a mere waste tablet whereon to trace its idiosyncrasies as they developed themselves. The beauty here visible would in no long time be ruthlessly overrun by its parasite, thought, which might just as well have fed upon a plainer exterior where there was nothing it could harm. Had Heaven preserved Yeobright from a wearing habit of meditation, peopel would have said, 'A handsome man.' Had his brain unfolded under sharper contours they would have said, 'A thoughtful man.' But an inner strenuousness was preying upon an outer symmetry, and they rated his look as singular. (第2篇第6章)

彼はパリで宝石屋の支配人をしていたが，自分の職業は所詮金持の虚栄心を満たす以外の何ものでもないと痛感し，きらびやかな都会生活を捨て，Egdon Heath の村人を教育しようと戻って来た。自己犠牲と奉仕の精神で無知な村人達に教育の光を当てるという一種の Prometheus 的使命を自らに課したのである。彼の目つきは the diety that lies ignominiously chained within an ephemeral human carcase shone out of him like a ray.' と述べられている。同じ Prometheus 的行為にかられる Eustacia はその目的が Egdon 脱出にあり，Clym のそれは Egdon へ戻る事にある。

Clym にとって Egdon Heath は切っても切り離せないものである。彼は Egdon の分身とも言える男である。前述のように，「荒野の創り出した人間」であった。彼の博愛主義的学校設置計画は，彼が Egdon への思慕と愛着の情を断ち切れずに戻って来る口実と考えられる。

Egdon Heath に対する全く違った考えを持つ Eustacia と Clym が結婚すればどうなるであろうか。相思相愛の二人はこの現実を知るに従って，衝突への道をたどって行き，その仲は破滅に至る。母と衝突して絶縁になっても，彼は Eustacia をとった。その Eustacia は当然 Clym を愛している。と同時に自分をこの Egdon Heath から連れて脱出し，パリへ移る事が出来る男として期待を持って愛してもいる。Eustacia は何時迄も愛が継続出来るものではな

いのを恐れる。

Yet I know that we shall not love like this always. Nothing can ensure the continuance of love. It will evaporate like a spirit, and so I feel full of fears.'（第3篇第4章）

更に訴える。

'O how I wish I was sure of never losing you - that you could not be able to desert me anyhow!'（第3篇第4章）

Clym は即座に「すぐ結婚しよう」と答える。その言葉はすぐに受け入れられるのだが，彼女は当然 Egdon を脱出してパリに行く事も計算に入れて答える。

'You will never adhere to your education plan, I am quite sure; and then it will be all right for me; and so I promise to be yours for ever and ever.'（第3篇第4章）

彼は Eustacia の Egdon 脱出の望みを過小評価して，「まあパリなんかの事はどうでもいいや」と考えている。彼女は未だ十九才では無理もないが，結婚を実生活の厳しさと結びつけて考えていない。Never mind what is - let us only look at what seems.' とか Still go on as we do now - just live on from meeting to meeting, never minding about another day.' などと言い，恋する事を楽しもうとする。これは彼女の本性に根ざす心でもあろう。こういう種類の女性は実生活に向いていない。自分でも Sometimes I think there is not that in Eustacia Vye which will make a good homespun wife.' と言い，作者も前に引用した文章の中にもあるように，「模典的な婦人にはどうもなれそうもない」と述べている。Clym はこういう Eustacia の享楽的性格を見抜けずに結婚する。

この後は悲劇にまっしぐらに進んでゆく。Yeobright 夫人と Eustacia とのいがみあい，偶然の重なりで招かれた Yeobright 夫人の死，それに伴う Eustacia と Clym の結婚生活の崩解，嵐の中での Eustacia の入水自殺。

Eustacia と Yeobright 夫人との不和などは，嫁と姑との不和で然程珍しい事ではない。息子が選んだ嫁が気に入らないなどという問題は，母親の息子に対する独占欲などもそれを助長しよくある事と言える。そして偶然が作用して，Clym を尋ねて来た Yeobright 夫人が死に至る事件も，筋の流れからゆけば仕方がなかったとも言える。しかし，Clym は Susan Nunsuch の息子 Johnny 少年に母の臨終の際，聞かされた「息子に捨てられて胸をかきむしられた女」と言う言葉から，Johnny に会いに行って，おおよその事の真相を知る。母を閉め出して招じ入れなかった張本人が Eustacia だと聞かされると，彼女に憎悪の念を燃えあがらせ，母殺しの罪を着せる。Eustacia; you have held my happiness in the hollow of your hand, and like a devil you dashed it down!' と責める。Clym は一方的にきびしい非難をする。遠慮会釈もなく難詰する。彼の徳性に難点があるのがあらわになる。

Was Yeobright's mind well-proportioned? No. A well-proportioned mind is one which shows no particular bias; one of which we may safely say that it will never cause its owner to be confined as a madman, tortured as a heretic, or crucified as a blasphemer.

Also, on the other hand, that it will never cause him to be applauded as a prophet, revered as a priest, or exalted as a king. Its usual blessings are happiness and mediocrity. (第3篇第2章)

確かに彼には大きな悩みがあった。即ち Three antagonistic growths had to be kept alive: his mother's trust in him, his plan for becoming a teacher, and Eustacia's happiness. それらを成就する努力をし，また Eustacia を精神的，肉体的に高いものとして求め，且つ教育の使命を達成する為の協力者として見做そうとしていた。そういう気持が大きければ大きい程その反動の大きさも正比例して大きくなる。

Eustacia はもう Clym には決して許してもらえないと思い，パリに Wildeve の助けを貸りて脱出しようとする。Rain barrow 迄やって来た時，彼女は充分なお金を持っていないのに気付く。勿論 Wildeve に頼めば，パリへの脱出費用など出してくれるはずであろう。だがそうすると彼の情婦として行動をしなければならない。彼女は煩悶する。

To ask Wildeve for pecuniary aid without allowing him to accompany her was impossible to a woman with a shadow of pride left in her: to fly as his mistress - and she knew that he loved her - was of the nature of humiliation. (第5篇第7章)

彼女にとって Wildeve は Clym との誓いを破って迄一緒になりたい男ではなかった。彼女は苦しむ。'To break my marriage vow for him - it is too poor a luxaury!' Wildeve とのパリでの生活は彼女には耐えられなかった。八方道がふさがれた後，彼女に選べる道は一つしかなかった。The gloom of the night was funereal; all nature seemed clothed in crape. と言われる程の闇の中で， Never was harmony more perfect than that between the chaos of her mind and the chaos of the world without. という状態で，彼女は入水自殺する。絶望に打ちひしがれて 'O, how hand it is of Heaven to devise such tortures for me, who have done no harm to Heaven at all!' と怨みの言葉を残して，自らの最後の自由を行使する。抑圧され自由を奪われた，自由の精神の持主は自己の情熱に従い，必然的に現実世界の束縛から逃れる為にその命を断つ。漆黒の闇の中で光を求める為に。そして死によって自分の本性を獲得し自己完成をする。彼女はその死によってやっと Egdon Heath の闇から逃れられた。光の世界に入って行ったその死顔は喜んでいるかのようであった。

They stood silently looking upon Eustacia, who , as she lay there still in death, eclipsed all her living phases. Pallor did not include all the qualily her complexion, which seemed more than whiteness; it was almost light. The expression of her finely carved mouth was pleasant, as if a sense of dignity had just compelled her to leave off speaking. (第5篇第9章)

Clym は母と Eustacia という二つの大事なものを一挙に失ってしまった。その事は彼の心の中に永遠の悔恨の情と自己愛の放棄をもたらした。こういう試練を受けた結果——

Yeobright had, in facl, found his vocation in the career of an intinerant open-air

preacher and lecturer on morally unimpeachable subjects. (第6篇第4章)

この作品で，脇役にまわる人物にも魅力のある者が幾人かいる。物語の進行に従って陰に陽に，色々の重要な役割を果すのが，紅殻屋 Diggory Venn である。Egdon Heath の中で彼は自由自在に出没する。Yeobright Thomasin には，社会的地位からみて相応しくないとして捨てられるが，拒絶されても彼女を恨む事もせず〕かえって陰になり陽なたになり助けてやる。その為には荒野の至る所に野営して，Wildeve の計画をことごとく挫折させてしまう。全身真っ赤にした姿で正に Egdon の精として超人的な働きをする。Wildeve と Eustacia が逢い引きをしそうだと感づくと，それを確認する為には自分の商売には位置的には不利な所（ひいらぎの陰）に潜み，毎晩一週間も見張ったり，Wildeve から百ギニー取り返す為にサイコロ賭博をして確実に勝ちをおさめたり，嵐の晩に奔流の中に次々と飛び込んだ Eustacia, Wildeve, Clym の三人を一人で救ったりする。彼がする事は殆んど悉く成功する。一つの例外は Eustacia を説いて Wildeve と別れさせようとした時位なものである。また彼が荒野を背景にして出現すると，あたりに異様な雰囲気を醸し出す。例えばサイコロ賭博の場面では，角燈の明りを頼りに Wildeve が Venn を相手に息をはずませながら，サイコロの目の数を追いかける。勝負も終りに近づいた時，一匹の大きな蛾が角燈の中に飛び込んで，その羽で火を吹き消してしまう。負け続けで気色ばんだ Wildeve は，闇の中で一時ぼんやりとしていたが，やがて螢を見つける。

Venn sat still, and his companion went hither and thither till he had gathered thirteen glowworms - as many as he could find in a space of four or five minutes - upon a foxglove leaf which he pulled for the purpose. The reddleman vented a low humorous laugh when he saw his adversary return with these. (第3篇第8章)

Wildeve は Egdon の闇とその精のような Venn の魔力につき動かされて，熱にうなされたように勝負を続け遂には持ち金全部負けてしまう。螢の光を中に置いて，Wildeve に賭けを続けさせる何か妖しい力が Venn にはあるのだ。この場面は夢のような幻想的なものであるが，読む者には強い感動を引き起し印象を与える。

Thomasin に対する受け入れられぬ愛にも拘らず，常に彼女を助けるという崇高な気持と，多才な能力とで，Venn のイメージは超人的なものを感じさせる。作者 Hardy の最初の計画では，最後迄孤独で奇妙な人物であり，人に知られず何処かに行ってしまう筈であったというが，矢張り Thomasin と結婚という結末はありそうもない感じを与える。

Thomasin は上辺は大人しいが，芯はしっかりとしていて強い女性である。Wildeve と結婚する時も，伯母の意見に必ずしも従わない。彼の本性を見抜いていても，社会的理由から自分の恥辱，伯母や Clym の恥辱を雪ぐ為に，敢えて彼と結婚する。その為に例え不幸に見舞われたとしても，自ら不幸に立ち向ってゆこうとする。彼女の尊厳さと立派な態度は，惜しい事に Eustacia の強烈な個性のもとで陰が薄くなってしまっている。更に彼女は Wildeve と結婚する事によって Eustacia と Clym との関係を間接的に促進する役割も担っている。

Mrs Yeobright は社会的地位もしっかりした，思慮分別のある女性である。半面 Clym の母親として，強烈な独占欲のある母性愛の持ち主でもある。その母性愛が原因となり偶然が重って，自分の死を招いてしまう。偶然が偶然を呼び，積み重って大きな不幸を呼ぶ。Hardy の作品にはこういう情況がよく起る。この作品では Mrs Yeobright の死に至る例が最も典型的なものであろう。Venn に忠告されて，過去をすべて水に流して Clym 夫妻と仲直りに，炎天下彼等のわび住い迄出掛ける。Clym は馴れない肉体労働で疲れ果て熟睡している。偶然 Eustacia は Wildeve と話している。Eustacia はその情況では応対に出られず，結果的には Mrs Yeobbright に門前払いを食わしてしまう。夫人は失意の中で帰途につく。暑さにやられ疲れて，その上蝮にかまれて死んでしまう。苦しさの為横になって休もうとする彼女の気持を Hardy は見事に描いている。

She leant back to obtain more thorough rest, and the soft eastern portion of the sky was as great a relief to her eyes as the thyme was to her head. While she looked a heron arose on that side of the sky and flew on with his face towards the sun. He had come dripping wet from some pool in the valleys, and as he flew the edges and lining of his wings, his thights, and his breast were so caught by the bright sunbeams that he appeared as if formed of burnished silver. Up in the zenith where he was seemed a free and happy place, away from all contact with the earthly ball to which she was pinioned; and she wished that she could arise uncrushed from its surface and fly as he flew then.

But, being a mother it was inevitable that she should soon cease to ruminate upon her own condition. Had the track of her next thought been marked by a streak in the air, like the path of a meteor, it would have shown a direction contrary to the heron's, and have descended to the eastward upon the roof of Clym's house.（第 4 篇第 6 章）

苦しいなかでも自分の息子の事が頭から離れない。この思いを心に抱いて苦しみながら死んでゆくのであった。気の遠くなった状態の中で，自由の世界へ赴いてゆく幻想を見る。これは望みを抱きながら挫折してしまった中心人物達の求める事の出来ないものであった。

The Return of Native もまた，Hardy の今迄訴えて来たところの「都会的心性」に対する「田園的心性」の優位を述べたものである。「都会的心性」は開放的で，進歩的，批判的であるが，土とは絶縁して，移り気・軽薄になりがちである。また「田園的心性」は閉鎖的で保守的であるが，土に親しみ自然と共にある。「田園的心性」が「都会的心性」より根元的だと作者は訴えている。これは，Eustacia, Wildeve, Clym の三人が濁流の中から引き上げられたが，「都会的心性」の持ち主である Eustacia と Wildeve は死んでしまったが，Egdon に自ら進んで戻って来た「田園的心性」の具現者 Clym は蘇生して助かるという事で端的に表わされている。

最後に取り上げる作品は *The Trumpet-Maior* である。これは Hardy が三十八才の 1878 年に書き始められて，1880 年に Good Words 誌に一年間連載されたものである。この雑誌は宗

教色の強い家庭的教養娯楽雑誌である為に，Hardy はその読者を念頭に置いて書かねばならなかったので，創作力を限定して娯楽性と大衆性を打ち出している。それがこの作品に大きな性格を与える事となった。Irving Howe(註4)は，大衆の娯楽性を強め作品の内部に奥深く入り込んで，その芸術性の源泉を探りあてようという試みが，この作品には当初から放棄されていると言っている。

確かに，娯楽的要素は多い。物語の背景は Napoleon 侵攻の噂におののくドーヴァー海峡に面したバドマスに近い村である。そして Napoleon 侵攻という歴史的事件を背景にした軽喜劇の形をとっており，歴史的事実は物語の筋を左右する重要な役割を果している。その中で，架空のものと現実のものとが，からみあって話を身近なものにしてゆく。架空の人物である Rebert Loveday が実在の Captain Hardy に面会に行ったり，Anne が国王 George 三世に出会ったりする。更に読者を喜ばせる為に Hardy は色々な工夫をしている。Napoleon の噂に脅えている人々に彼が上陸するという誤報がもたらされる。人々は大騒ぎをして逃げる。誤報という事を知らされた Festus は，今迄意気消沈していたのに急に元気付き，誤報とは知らない仲間達の所で大ぼらを吹いて悦に入る。

It was a magnificent opportunity, and Festus drew his sword. When they were within speaking distance he reined round his charger's head to Budmouth and shouted, 'On, comrades, on! I am waiting for you. You have been a long time getting up with me, seeing the glorious nature of our deeds to-day!'

'Well said, Derriman, well said!' replied the foremost of the riders. 'Have you heard anything new?'

'Only that he's here with his tens of thousands, and that we are to ride to meet him sword in hand as soon as we have assembled in the town ahead here.'

'O Lord!' said Noakes, with a slight falling of the lower jaw.

'The man who quails now is unworthy of the name of yeoman,' said Festus, still keeping ahead of the other troopers and holding up his sword to the sun. 'O Noakes, fie, fie! You begin to look pale, man.'

'Faith, perhaps you'd look pale,' said Noakes, with an envious glance upon Festus's daring manner, 'if you had a wife and family depending upon ye!'

'I'll take three frog-eating Frenchmen single-handed!' rejoined Derriman, still flourishing his sword.

'They have as good swords as you; as you will soon find,' said another of the yeomen.

'If they were three times armed,' said Festus - 'ay, thrice three times - I would attempt 'em three to one. How do you feel now, my old friends Stubb?' (turning to another of the warriors). 'O, friend Stubb! no bouncing health to our lady-loves in Oxwell Hall this summer as last. Eh, Brownjohn?'

'I am afraid not,' said Brownjohn gloomily. (第26章)

こんな悪ふざけは，Anne にもなされる。彼女が Napoleon の噂を聞いて逃亡しようとする際，人里離れた草原で Festus に操を奪われる寸前に迄追いつめられる。だがやっとの事で Festus の馬を奪い逃げのびる事が出来る。このように次々にスリリングな場面が出て来る。

更に人間関係でも，Anne と Robert が恋仲であるのを John が知り，愛する弟の為に彼女から身を引く決心をして，自分には女優の恋人がいると言う。偶然のいたずらでその恋人は，Matilda だと Anne 達に誤解されてしまう。Matilda は未だ Loveday 兄弟を恨んでめり，それに Festus が加わって Robert を水兵強制募集隊に密告する。Robert は必死の努力で逃げのびるが負傷してしまう。そのうちに Robert は兄 John が Anne を好きなのが分り，彼女を兄に譲って Captain Hardy の所に水兵志願に行く。Anne は去って行く Robert を遠くから見る為にポートランド・ヒルを登ってゆき，頂上で海に浮んで消えてゆく三本マストの船を見送る。

The great silent ship, with her population of blue-jackets, marines, officers, captain, and the admiral who not to return alive, passed like a phantom the meridian of the Bill. Sometimes her aspect was that of a large white bat, sometimes that of a grey one. In the course of time the watching girl saw that the ship had passed her nearest point; the breadth of her sails diminished by froreshortening, till she assumed the from of an egg on end. After this something seemed to twinkle, and Anne, who had previously withdrawn from the old sailor, went back to him, and looked again through the glass. The twinkling was the light falling upon the cabin windows of the ship's stern. (第34章)

これはトラファルガーの戦いへの出発であり，Nelson への惜別の念を起させ，母国の歴史の場面に於ける感情移入の作用を起させる。更に若き女性の恋人の送別というロマンティックな背景にもなっている。二重三重にこの場面は盛り上りを見せている。

この物語の娯楽性はその喜劇性に大きく依存している。登場人物は道化的要素を大なり小なり持っている。村の小地主 Derriman 老人は自分の遺産をねらう Festus や Napoleon の掠奪から財産を守ろうと日夜心をくだく。粉屋の Loveday に預けた貴重品が気になって夜中に舞い戻って来たり，甥の Festus が長期滞在をするのを知ると，口では嬉しいと言いながらも蒼ざめてふるえたりする。また一旦旅に出たが，家の事が心配で戻って来ると，Festus とその仲間が家に勝手に上り込んで酒盛りをしている。そこで彼は一計を案じて大きな叫び声を上げる。

Man a-lost! man a-lost!' he cried, repeating the exclamation several times; and then ran and hid himself behind a corner of the building Soon the door opened, and Festus and his guests came tumbling out upon the green.

"Tis our duty to help folks in distress' said Festus. Man a-lost where are you?'

"Twas across there,' said one of his friends.

'No; 'twas here,' said another.

Meanwhile Uncle Benjy, coming from his hiding-place, had scampered with the quickness of a boy up to the door they had quitted, and slipped in. In a moment the door flew together, and Anne heard him bolting and barring it inside. (第 9 章)

この場面などは，喜劇的な雰囲気に満ちている。

Mrs Martha Garland は精神年令が実際の年令に追いついていない，思慮分別に欠ける女性である。自分の社会的身分も弁えずに，家主の Loveday 家のパーティーに出席したがって娘と言い争いをする。母の子供っぽさと娘の分別との対照がおかしみを誘う。

When she came downstairs her mother said, 'I have been thinking what I ought to wear to Miller Loveday's to-night.'

'To Miller Loveday's?' said Anne.

'Yes. The party is to-night. He has been in here this morning to tell me that he has seen his son, and they have fixed this evening.'

'Do you think we ought to go, mother?'said Anne slowly, and looking at the smaller features of the window-flowers.

'Why not?' said Mrs Garland.

'He will only have men there except ourselves, will he? And shall we be right to go alone among 'em?'

Anne had not recovered from the ardent gaze of the gallant York Hussars, whose voices reached her even now in converse with Loveday.

'La, Anne, how proud you are!' said Widow Garland. Why, isn't he our nearest neighbour and our landlord? and don't he always fetch our faggots from the wood, and keep us in vegetables for next to nothing?'

'That's true,' said Anne

'Well, we can't be distant with the man. And if the enemy land next autumn, as everybody says they will, we shall have quite to depend upon the miller's waggon and horses. He's our only friend.'

'Yes, so he is; said Anne. 'And you had better go, mother; and I'll stay at home. They will be all men; and I don't like going.'

Mrs Garland reflected. 'Well, if you don't want to go, I don't ' she said. Perhaps, as you are growing up, it would be better to stay at home this time. Your father was a professional man, certainly.' Having spoken as a mnther, she sighed as a woman. (第 3 章)

Martha は Robert が帰って来た時も，無邪気な子供っぽさを示す。彼が買って来たすべての土産品に夢中になってしまう。これは人物の性格描写としても優れており，近代小説の特徴を明らかに示している。

Robert はその行動様式，思考形態共，道化的な要素の持ち主である。上辺だけ見て簡単に女性に惚れてしまい，その本性を見抜けない。軽率に Matilda と結婚寸前迄いったり，Captain Hardy にとりたてられて水兵になった後，他の女性と浮名を流したりする。その上義侠心を起こして Anne を兄に譲った後，彼女なしではいられないという節制のなさ。そういうものが彼を軽く見せる。また失跡した Matilda の追いかけるのだが，途中で疲れていやになり投銭をして，追跡するかしないか決めようとする。しかし，追跡する方に占いが出ると，占いなど信じるに足らないとやめてしまうのも喜劇的である。

その進行する筋の上で，Loveday と Martha の結婚が Robert と Matilda の為に用意した御馳走が無駄になるからといって，それを利用して行われるというのは，中年以上の男女の生活上のしたたかさを感じさせ，且つユーモラスである。また田園的なのどかさも感じられる。

だが，その半面，物語全体に「死」を暗示する「時」の観念とヨーロッパに荒れ狂う大動乱が陰を落している。こういう激動の時代には人々は得体の知れない不安と死を予感し意識するようになる。自分の身近かな人に死が訪れるのを見て，自分の持つ時間にも必ず終りがあるのだという気持にとらわれる。その終りが自分には知れずに近付いて来るのを感じる。Anne の眺めている水車用貯水池の流れは，流れて溜まらない「時」の象徴とされる。

Immediately before her was the large, smooth mill-pond, overfull, and intruding into the hedge and into the road. The water, with its flowing leaves and spots of froth, was stealing away, like Time, under the dark arch, to tumble over the great slimy wheel within. (第1章)

Hardy の描くオーヴァカムの村全体は人々もその生活も伝統的な特質を持ち，昔からの姿を変えていないが，外の世界は刻々と変化してゆく。時の流れもはっきり感じられない場所から，時の大きな変化を Anne は見る。

Anne now felt herself close to and looking into the stream of recorded history, within whose banks the littlest things are great, and outside which she and the general bulk of the human race were content to live on as an unreckoned, unheeded superfluity.(第13章)

時は絶え間なく移ろい，生きてゆく人々はそれに否応なく流されてゆく。その時の意識を巧みに使って作者 Hardy は物語を遠隔化し情緒化してゆく。

It was just the time of year when cherries are ripe, and hang in clusters under their dark leaves. While the troopers loitered on their horses, and chatted to the miller across the stream, he gathered bunches of the fruit, and held them up over the garden hedge for the acceptance of anybody who would have them; whereupon the soldiers rode into the water to where it had washed holes in the garden bank, and, reining their horses there, caught the cherries in their forage-caps, or received bunches of them on the ends of their switches, with the dignified laugh that became martial men when stooping to slightly boyish amusement. It was a cheerful, careless, unpremeditated half-hour, which returned

like the scent of a flower to the memories of some of those who enjoyed it, even at a distance of many years after, when they lay wounded and weak in foreign lands. (第3章)

時の二重映しによって，生の短かさ，はかなさを読者に印象づけるのである。この物語自体が，今となっては昔となってしまった時代についてを記録であり，一般的な資料に加えて作者自身の子供時代の逸話や目撃者の思い出が多くの部分を占めているのであろう。それ故，物語全編に生き生きとした，妙になつかしさを呼びおこすところがある。

The present writer, to whom this party has been described times out of number by members of the Loveday family and other aged people now passed away, can never enter the old living-room of Overcombe Mill without beholding the genial scene through the mists of the seventy or eighty years that intervene between then and now. First and brightest to the eye are the dozen candles, scattered about regardless of expense, and kept well snuffed by the miller, who walks round the room at intervals of five minutes, snuffers in hand and nips each wick with great precision, and with something of an executioner's grim look upon his face as he closes the snufters upon the neck of he candle. Next to the candle-light show the red and blue coats and white breeches of the soldiers - nearly twenty of them in all besides the ponderous Derriman - the head of .he latter, and, indeed, the heads of all who are standing up, being in dangerous proximity to the black beams of the ceiling. There is not one among them who would attach any meaning to 'Vittoria', or gather from the syllables Waterloo' the remotest idea of his own glory or death. Next appears the correct and innocent Anne, little thinking what things Time has in store for her at no great distance off. (第5章)

このように動詞の時制を過去形から現在形に移して，過去の楽しい思い出を生き生きと目の前に描出するのである。そしてこの情景が過去のものであり，失われたものである故に，更になつかしさ，時のうつろい易さが胸を打つのである。しかしそこでは現在という時点に立つ作者が過去を鳥瞰しつつ，「全知の者」という立場で，人間の行為を見，人間自身のアイロニアルな無知というものに関心を抱き考えている。作者自身も含めて，人間はこれから先何が起るか全く分らない。それを気付かぬ人々に深い哀れみの情を示しているのである。

移り変わる時を作者は自然についての描写の中で暗示してゆく。

The heaviness of noon pervaded the scene, and under its influence the sheep had ceased to feed. Nobody was standing at the Cross, the few inhabitants being indoors at their dinner. No human being was on the down, and no human eye or interest but Anne's seemed to be concerned with it. The bees still worked on, and the butterflies did not rest from roving, their smallness seeming to shield them from the stagnating effect that this turning moment of day had on larger creatures. Otherwise all was still. (第1章)

時は確実にそして容赦なく移ってゆく。John や Robert とても例外ではない。

In the large stubbard-tree at the corner of the garden was erected a pole of larch fir, which the miller had bought with others at a sale of small timber in Damer's Wood one Christmas week. It rose from the upper boughs of the tree to about the height of a fisherman's mast, and on the top was a vane in the from of a sailor with his arm stretched out. When the sun shone upon this figure it could be seen that the greater part of his countenance was gone, and the paint washed from his body so far as to reveal that he had been a soldier in red before he became a sailor in blue The image had, in fact, been John, one of our coming characters, and was then turned into Robert, another of them. This revolving piece of statuary could not, however, be relied on as a vane, owing to the neighbouring hill, which formed variable currents in the wind. (第2章)

John も Robert も時の流れの中では無力でしかあり得ない。風見が風の向きのままに動くように，彼らも時の流れに翻弄される事を象徴しているのであろう。勿論 Robert の軽薄な性質や移り気の象徴でもあろうが。

Hardy がかくも時に対して関心を示したのは，愛も死もどの時代でも不変であると主張したかったのであろう。そして愛と結びついた死は限りなく美しい詩的主題となる事を作者はよく知っていた。運命と対決する勇気，その尊厳をもって John は闇の中に去ってゆく。

The candle held by his father shed its waving light upon John's face and uniform as with a farewell smile he turned on the doorstone, backed by the black night, and in another moment he had plunged into the darkness, the ring of his smart step dying away upon the bridge as he joined his companions-in-arms, and went off to blow his trampet till silenced for ever upon one of the bloody battle-fields of Spain. (第41章)

人間的信義を重んじ，愛する者たちの為に自我の充足を放棄してしまう John.。この無償の行為を通して人間性の尊厳を示すかのように。そして物語の語られている「時」と物語の中の「時」との間の「時」，即ち第三の「時」に彼は進んでゆき死を迎えるのである。生命は「時」と共に移り死に至る。生命は止る事は出来ない。「時」に流され連れてゆかれる。「時」が生命に猛威をふるい，自分から引き離してしまう状態，それが死である。この「死」を描き出すのが，Hardy の主題であったのは明らかである。「死」を下敷きにして，「生」を描くとその「生」ははっきりと浮び上って来る。この作品の娯楽性を持つ喜劇性は，こういう下敷きを持つ故に，尚明らかに浮び上って来るのである。(本学講師＝英語担当)

註

註1. Rowse, A. L. : *The Annotated Shakesaeare, Vol.* 1 *The Comedies* : Clarkson N. Potter : 1978 : P. 356

註2. Palgrave, Francis Turner : *Golden Treasury* : Eueryman's Library : 1967 : P.148

註3. Hardy, F. E. : *The Life of Thmas Hardy* : Macmillan : 1962 : P.422

註4. Howe, Irring : *Thomas Hardy* : Macmillan : 1967 : P.41